

うか。妙な絵をかいた子ども、残忍な行爲をとる子ども、いろいろなことを考える結果が、遂に強い恐怖心となって私の上のしかかかって来た。たびたび起る喧嘩の仲裁が、何の悪影響も両者に残さずすんだらうか。遊びの場面においても、生活指導においても、おとなの不当な要求を強いはしなかつたらうか。ああしたら、こうしたらあななりはしないかと、それが必要以上のいたずらな考えとなって、先廻りする。手足が完全に萎縮して、ただ「怖い」の一語がすべてを支配してしまった。たぶん、保育室の空気は陰うつな、おどおどしたものであったらう。どこの隅からも「生」を感じとれないほどに。他の組が生き生きとしているのにひきかえ、何とみじめな姿だったらう。とかく、私自身の考えを変えなければならぬ。まず、おとなであるという意識、教えるという態度を捨てることだ。努めて子どもたちを前にしたときに。こう心に決してから、しばらくたったある日の「話し合い」のときに、かつて、私が保育中に味ったことのない感激を覚えたのだった。それはごく普通の会話だった。しかし平凡に聞える言葉の内に、何か熱い気持のつたわりを強く、たしかに感じとった。すばらしい一瞬だった。その一瞬は、幼い子どもたちを一個の人間として私の目前に具現された。人間と人間のふれあい、心と心の接触、これを子どもたちとの間に感じとったと知った私の心は歓喜にあふれた。随喜の涙が頬を流れた。彼らの前に立ち、彼らから求められるものは、いつわらない真摯な人間の姿なのだった。子どもたちと青空のもとで満身に陽を浴びながら、無心に遊ぶときこそ、きっと私の顔は、満足しきった微笑をたたえているにちがいない。

(幼稚園教諭・東京)

## 掃除をしながらかえること

栗田成子

たった今子どもたちが帰ったあの保育室で習慣的に、掃除をしようとうきを手にしながらか、今日一日の子どもたちとのやりとりを思い浮かべます。

G夫が言った「先生、ぼく、おばあちゃんきらいなんだ。」「なぜ?」「だって、お兄ちゃんにばかりいいおかずいれてやって、ぼくにくれないんだもん。」と、わたしはどう答えてよいかわからなかつた。この地域には問屋が多く家の中は祖父母、父母、叔父叔母、店員と大家族制なので、いろいろ子どもにゆがみがしわよせされるようです。忙しい親は子どもを用人まかせにしたり、そうかとうと、ときには甘やかしたり、祖母の偏愛に差別されたりします。

G夫はこの差別のなかで淋しいのでしょうか。幼稚園では「先生こうするの」「先生遊ぼうよ」と、何かにつけて先生にくっついてきます。友だちと遊ばせようとすれば、友だちが仲間に入れてくれないと訴えてきます。友だちの方からどうのこうのというのではないのに、みんなと遊べないらしいのです。このことで母親と話し合いましたとき、母親は泣いて祖母の偏愛のあれこれ話してくれました。ほんとうにこのG夫をどうしてあげたいだろうか、またどれだけのことがしてあげられるのだろうか、と思悩むのです。

困るのはG夫だけではありません。S子は毎日歌のおけいこ、バ

レーのおけいこと忙しいようです。このようにおけいこをやっていることが母親の自慢の種ですが、幼稚園でのS子は、自分は動かず他人のことをとやかくつげ口をし「あんたは入れてやんないよ」などと女王のようにふるまっています。そうかと思うとH子はみんなの仲間に入ろうとせず、うずくまるようにして、みんなの遊びを眺めているだけで、誘っても入ろうとしません。

私たちは今四〇名の三歳児をうけていますが、この四〇名はそれぞれちがいがいもっています。生活の条件がちがうなかで、てんでにちがって育っています。この子どもたちが、それぞれ持っている力を伸ばしてやりながら、同時に仲よく遊んだり話し合ったりできるように育てたいと念じておりますが、子どもたちはすでにこれまでの生活のなかで、それをさまざまげするような殻を身につけています。

どうしたらこの殻をぬがせることができるだろうか、ほんとうに悩みの種です。

私はもっと子どもの中に入りこんで、子どもと一しょにその考えをひらき、また高めていきたいし、またそのために家庭との話し口を多くし、おたがいに協力していこうとは思いますが、思いいつも実行は進みません。

そこで私たちが一歩前進するためにもっと保育の技術を勉強したり、また世間のことや学びとったりして、私たち自身の実力をつけていきたい、そのための時間もほしいし、指導者もほしいとつくづく思うのです。

(幼稚園教諭・東京)

## 保護者に、どのくらい

## 協力しなければならぬだろうか

杉本知子

私どもの仕事は、私どもだけで、一生懸命になっても、その子どもも家庭の協力がなければ、よい結果はなく、場合によっては、悪い結果を招くこともあることを覚えていきます。

そして、私どもの要求に応じて家庭に協力していただくことはたびたび考え、その方向に近づけるのは、わりあい容易にできるのではないかしら、ということも覚えていきます。

しかし、その反対に、家庭生活のよき援助者と同じくらい考えなければならぬのではないかと。家庭の要求を、どの位聞き、それを満し、さらに、保育者のもつ理想と合せていったらよいのか、と考えております。一例をあげてみますと、

必要以上にきびしい保育をされた子どもが、急に子どもの心理を考え、自発性ある子どもにしようとか心がけて保育されました。その家庭の反響は、次の通りです。以前はいいつけをよく守った、素直だった、最近では、まったくいうことを聞かないし、口がたっしやになるばかりで、とのこと。母親にしてみれば、自分も一日仕事で疲れて帰ってくるのに、いうことは聞かない、口返答はする、手はかかる、気分はいらいらする、といったことで、現在の保育の方が、たいへん迷惑と感じるらしい。とにかく、子どもが母親のいうなりに